

原文

構造主義、グローバル化のいずれについても、誤解するおそれのある表現である。

■構造主義 人間は自律的な主体ではありえず、時代・地域・所属集団の構造に大きく影響される存在である、という考えにもとづき、その構造を解明しようとする立場。グローバル化への賛否はそれぞれ社会構造に起因するものであり、賛成側にも反対側にも絶対的真理があるわけではないことになる。

グローバル化には新たな可能性も課題もある。有力な現代思想の一つである構造主義¹は、グローバル化について性急にその当否を判断することを戒めている。しかし、フランスの人類学者レヴィ=ストロー²スや哲学者フーコー³らのこの思想が急速に世界中に普及したのは、経済と文化のグローバル化のおかげであったことはまちがいない。

(*関連修正 p.270,271,272 p.273 25行目)

(意見番号 52 の修正に伴い、5 行削減されるため、p.270 ~ 271 は 1 ページにつき 1 行ずつ行数を減らし、p.272 に送る。また p.273 の 25 行目以降の 2 行を 4 行に増やし、p.273 の冒頭の 2 行を p.272 に送る)

国連だけでなく、民間団体で非営利のNGO(非政府組織⁴)の活動に対しても、グローバル時代には、期待が高まっている。

(*関連修正 p.272 側注 2 本文 24, 25 行目, p.273 側注 3, 4 本文 16 行目)

(意見番号 52 番の修正により注が一つ削除されたため、その他の側注番号は一つずつずれ、側注 2 は側注 1 に、側注 3 は側注 2 に、側注 4 は側注 3 となる。また注が一つ削除されたことによりスペースが生じたため、現在 p.273 にある側注 3 「ヒンドゥー復興主義」は p.272 へ移動する。)

解放の神学¹

ヒンドゥー復興主義²

グローバルな問題³

1 解放の神学

2 ヒンドゥー復興主義

3 京都議定書(1997年)

修正文

(削除)

(削除)

一方近年は、非営利の民間団体であるNGO(非政府組織³)の活動への期待も高まっている。グローバル化時代のNGOは、私たち自身が世界の課題に直面し、行動をおこす可能性を広げた。これからの世界は、私たち自身の行動と思考能力がいつそう問われている。

1 解放の神学

2 ヒンドゥー復興主義

3 グローバルな問題

1 解放の神学

2 ヒンドゥー復興主義

3 京都議定書(1997年)